平成24年6月1日

子ども樹木博士ニュース

2012－6 No.47

子ども樹木博士認定活動推進協議会

巻頭言

若い母親への期待

公益社団法人大日本山林会　会長　箕輪　光博（当協議会 顧問）

新緑の季節、爽やかな春風が体の中を吹き抜けて行く。歳のせいか、自宅から最寄りの駅に向かう途中の田舎の風景が懐かしく感じられるようになった。特に、線路沿いの大きな農家の屋敷内に枝を広げているムクノキ、エノキ、ケヤキ、ミズキ等の大木、老木は、周りのこの半世紀の変容を眺めつつ、しっかりと自分を保っている己の姿を誇っているようにも見える。私は、歩きながら、欅の真似して空に手を挙げ体を伸ばしてみる。実に気持ちが良い。また、まばゆい光の下で、榎の葉の葉脈を下から透かして見るのも好きだ。さらに、ムクノキの葉の感触も何とも言えない手触りである。まもなく、栗の花が強烈な臭いを発し、エゴノキが美しい白い花をつける春の真っ盛りがやって来る。

ところで、私は、知る人ぞ知る碁狂の一人で、近年、NPO法人「青少年囲碁協会」の設立に関わり、学校教育の中に囲碁教育を導入する活動に取り組んでいる。その中で思うことの一つは、囲碁に対する興味を子どもに持たせる早道は、母親をその気にさせることだということである。私の友人達は、子どもに囲碁を教えようとして大半の方が失敗している。私の場合は、奥方が囲碁嫌いなので、はじめから問題にならなかった。同様のことが、子ども樹木博士活動の普及に関して当てはまるような気がする。現世代の若い親たちは私の年代とは違って、小さいときに田舎や里山体験を満喫していない。したがって、自然体験に飢えているところがあるのではなかろうか。昨年の東日本大震災以来、森林に対する国民の関心は高まっている。遅ればせながら、今年の1月30日、大日本山林会は、130周年を記念して、「森の世界に出かけよう―森林教育のさらなる展開をめざして―」というシンポジウムを開催し、パネラーとして、4人の「ナデシコ」にご協力をいただいた。参加者は180人に及び、その半数以上が林業以外の方々であった。また、大日本山林会が昨年発行した「小学校高学年のための教本：日本の森林と林業」も今のところ好評で、現場の小学校や子ども樹木博士活動での一層の利用を期待している。

今年のみどりの日、4月29日に、千葉県野田市の清水公園で行われた「みどりのふるさとづくりフェスタ＜私たちは、美しい緑に感謝し、大切なみどりを育て、未来に伝えます＞」に、「野田の樹木を見て歩こう会」の一員として参加した。会は今年の秋に20周年記念行事を予定しており、長年にわたって地元野田市の緑や樹木の普及に大きな貢献をしてきた。当日の観察会に参加する傍ら、緑陰の下で集い、楽しんでいる多くの親子連れの姿を見るにつけ、この中から一人でも多くの「若い母親」が観察会に飛び入りしてくれたら、子ども樹木博士活動の裾野も大きく広がるに違いないと思った。

【目　次】

巻　頭　言　若い母親への期待　公益社団法人大日本山林会 会長　箕輪　光博…1
特　集　Ⅰ　各地のグループとの交流会で広がる活動　森林インストラクター　吉村　妙子…2
特　集　Ⅱ　子ども樹木博士認定活動の実施手法―その1：準備編―　森林インストラクター　柳原　高文…3
事例報告Ⅰ　森林インストラクター会“愛”　子ども樹木博士担当　鵜飼　洋子…4
事例報告Ⅱ　苦難から達成感へ！　土岐市「子ども樹木博士」認定実行委員会　高橋　久義…5
シリーズ　東南アジアの木々たち(16)―南国の象徴・ココヤシ①―　自然と植物の観察会 TREECIRCLE　梅本　浩史…6
子ども樹木博士質問コーナー　茨城県植物園緑のインタープリター・森林インストラクター　堀内　孝雄…7
ア・ラ・カルト：樹木の名前・方言、事務局だより　……8

特集Ⅰ

各地のグループとの交流会で広がる活動

森林インストラクター　吉村　妙子

木々の緑が濃く美しい季節になりました。今年は寒さが長く続いて、春の花の開花時期が例年より遅かったという印象です。また、知り合いからの話ですが、例年なら開花時期が少しずつずれる何種類かのスミレ類が短期間に集中して咲いていたそうです。この夏の気候はどうなるのか、植物の開花・結実や動物たちの生育サイクルに影響が出ないか、気になるところです。

さて春先のことですが、環境省「モニタリングサイト1000里地調査」に参加して動物調査や植物観察をしている私たちのグループは、全国各地でやはりこのプロジェクトに取り組んでいるグループとの交流会に参加してきました。そもそも参加を決めたきっかけは、これまでの数年間の動物調査で集めたデータをまとめてみようという話になり、何とか報告書という形にできたことでした。センサーカメラ調査による2年間余りのデータを中心に、約5年間の目撃情報やトラップ調査の結果とあわせてまとめてみると、里山に生息するかなりの種類の哺乳類が確認できたことが分かりました。グラフや写真や文章など目に見えるかたちにできると、フィールドの姿がよりくっきりと描かれて、自分たちのフィールドへの興味が一層深まりました。さらに、「ほかのグループの人たちにも、私たちのフィールドを見てほしい」、「専門家の意見をきいてみたい」、「ほかの森ではどんな生き物が観察できているんだろう」など、外への関心が新たに高まってきました。

サカハチチョウ。チョウと食草・吸蜜の関係から樹木を観るのも楽しい。

交流会では、専門家からの最新情報提供、各グループから調査結果の報告、調査や運営の課題解決案を話し合うワークショップなどを行いました。プレゼンテーションを使った発表はグループとして初めてで、慣れないながらも資料作りから当日の発表まで何とか乗り切り、とてもいい経験になりました。またワークショップでは、活動している人たちが集まっただけに実際的な話ができ、課題や悩みを共有できた安心感や参考になりそうなアイディアが得られました。市民グループの交流会の参加者はみな、お互い仲間同士として話を聞き、理解し合おうという姿勢なので、とても明るく建設的な雰囲気でした。

外の空気を吸って刺激を受けた効果で、交流会が終わってから「ほかの分野の調査にも挑戦してみたい」、「地元とのつながりを作りたい」といった声が、グループ内で出てくるようになりました。次の活動日からは早速、チョウの調査票を使って観察を始めています。地元とのつながり作りはこれからですが、新しい活動のイメージが広がりつつある気がします。

子ども樹木博士を開催されている皆様は、私たちのような自然関連の自主グループとして、あるいは学校や行政などの組織における社会事業の一環としてなど、様々な形で実践されていると思いますので、他のグループとの交流にも様々なかたちがあることでしょう。子ども樹木博士の発表会や、同じフィールドで活動する団体同士の交流会など、もし何かきっかけがあれば参加してみてはいかがでしょうか。その際、準備は大変ですが、発表者として参加すると得られるものが一層多い気がします。そうでなくても、プログラムの企画や広報のアイディア、活動運営の改善策、思いを共有できる仲間、グループメンバーの意外な特技など、きっと価値ある発見があると思います。

特集Ⅱ

子ども樹木博士認定活動の実施手法

―その1：準備編―

森林インストラクター　柳原　高文

トチノキの冬芽を観察していた今年の春のことです。「べたべたした手触りだね。これを、モチモチと表現したお話があるけど分かるかな？」、この投げかけに小学校4年生が「あっ！モチモチの木だ！」、「良く気がついたね！教科書に出てくるモチモチの木は、このトチノキのことなんだよ。」、「じゃぁ、豆太がトイレにいくのを怖がった大きな葉がこの芽に入っているの？」・・・話はどんどん発展していきます。「モチモチの木」とは斎藤隆介の作品で、多くの小学校3年生の国語の教科書に掲載されています。このように樹木の説明をするときに、その樹木が教科書に掲載されていると、話がどんどん発展していきます。子ども樹木博士認定活動は、子どもたちが樹木への関心を高めていくきっかけになる初めの一歩の活動です。この活動をスムーズに進行させるためにも認定樹木の選定から説明など、工夫しなくてはならないことがたくさんあります。今回は、活動の準備についてその手法をいくつか示していきます。

どこで開催するのか？

都市公園や校庭で実施する場合は枝葉の採取が困難ですので、樹木を採取しない方法で行わなくてはなりません。その場合、説明を行った場所とは違うところで認定試験をします。同じ樹種がある別コースを見つけるか、道順を変えて説明の順番と試験の順番を変える方法などが考えられます。また、管理者に届け出をすることで採取が認められることもあるので、役場の公園課や学校の校長先生などに確認してみることも大切です。

このように、都市公園や学校での実施は障害がありますが、参加しやすいこと、安全な場所であること、トイレなどの設備が整っていること、屋根のあるスペースがあることなど利点もたくさんあります。

里山や森林内で実施する場合、貴重な種でなければ樹木の採取が可能な場所が多くあります。樹種も多様ですので、主催者の目的にあった選定樹木で実施できる可能性があります。屋根のある場所の確保が難しいことや移動する距離が長いことなどの問題はありますが、自然豊かな場所での実施は、樹木の観察だけではなく、大自然の心地よさを味わえる素晴らしさがあります。

選定樹木はどうするのか？

冒頭で教科書に掲載されている樹木の話をしましたが、参加する子どもたちが習った教科書に目を通してみることも必要なことです。樹木というと理科を考えがちですが、社会科の環境関連、国語の物語などにも樹木の名前が掲載されていることがあります。

この活動は、子どもたちが樹木名を覚えることですが、樹木に親しみ、樹木を通して自然への関心を高めることが本来の目的です。ですから、ゲームのキャラクター名を覚えるような樹木の設定ではなく、その場所に適した樹木を選定したいものです。例えば、森林の成り立ちを知ってもらいたいので陽樹中心に選定するとか、里山での木材の利用や萌芽更新を知ってもらいたいのでコナラ、クヌギなどを中心に選定するとか、美しい花を咲かせる公園の樹木を選定するなど、主催者の思いから樹種を選定することが大切だと思います。そして、この活動を通して子どもたちが自然に関心を持つ第一歩になってくれたら嬉しく思います。

事例報告Ⅰ

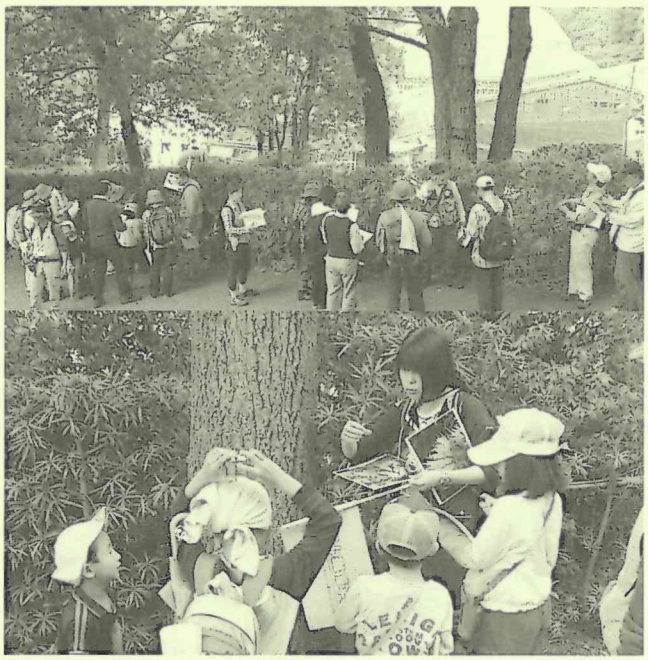
森林インストラクター会“愛”

子ども樹木博士担当　鵜飼　洋子

平成24年度になり、森林インストラクター会“愛”では、今年度4回の子ども樹木博士の実施を計画しました。年間の計画を立てるに当たり、昨年取り組んだ80種の樹木を見直し、昨年秋頃に、本年度は街路樹や公園樹を含め、身近に見ることが出来る200種の樹木を選定することにしました。テキストは、昨年同様に手書きイラストを入れたオリジナルテキストを作成し、参加者が興味をもって取り組めるようにわかりやすい表現に心がけ、子ども用と大人用の2種類を用意しました。

第1回は、5月6日に名古屋市の東山植物園で開催しました。開催に当たっては、4月1日にコースを決めるための下見を行い、「雌雄別種を観察して子ども樹木博士になろう！」ということがテーマでしたので、樹木の選定もそれに合ったものを含め30種を選びました。午後はクラフトとして、ヒノキの間伐材をベースに小枝や木の実を飾り付けたプレートづくりを行うこととしました。

プログラムには、小学生5名、大学生4名、大人14名の計23名にご参加していただきました。終了後の参加者のアンケートには、「樹木の特徴、見分け方のポイントなど、説明がわかりやすかった。街路樹も今後興味を持ってみることができると思いました。」、「2回目の参加ですが、とても有意義な時間でした。講師の方の知識には本当に感心します。」、「親切に説明してもらいました。楽しかったので是非次回も参加したいです。」、「クラフトが楽しかった。またクラフトをやりたいです。」、「今日見た樹木を別の季節に見て、季節による違いを観察したいです。」、「先生の説明で、ちょっと意味の解らないところがあった。時間が少し長かったです。」、「話は分かりやすかったが、もっと覚えやすくしてほしい。」など、たくさんの意見をいただきましたので、次回以降に生かしていきたいと思います。



観察風景

プログラム後のスタッフ反省会では、「人に伝えることは難しいと改めて感じた。」、「時間配分に気を付けたい。生物多様性や生態系サービスについてももっと伝えることが大切なのでは」、「トライアルとその解説、認定試験などの時間が短すぎるのではないだろうか。」などの意見が出されましたので、次回以降改善できるように意識していくことを確認しました。

「子ども樹木博士」の認定試験だけでなく、遊びの要素も取り入れることを目的に行っているクラフトは参加者からの評判もよく、年齢・性別を問わず楽しんでいただいています。今後もクラフトはプログラムの中に取り入れていきたいと思います。

「樹木の名前を覚えて樹木と友だちになろう。」をサブタイトルにしたのは、参加者に樹木の名前を知っていただくことで身近な自然に興味（親しみ）を持っていただき、生物多様性、生態系サービスに対する理解を深めていただきたいからです。それは同時に環境に対する問題意識を持てる人材の育成を掲げている私たちの目標にたどり着くためです。

「子ども樹木博士」では、まずは参加者の方にプログラムを楽しんでもらうこと、森林インストラクターも一緒に楽しみながら進めていくことが大切なことだと思います。

次回は6月17日です。また参加者の方々と楽しい時間を共有できるのが今からとても楽しみです。

事例報告Ⅱ

苦難から達成感へ！

土岐市「子ども樹木博士」認定実行委員会　高橋　久義

はじめに

定年退職し、これまで自然を相手とする職場にいて、子ども樹木博士の存在を知り、地球の温暖化という自然環境の変化には緑の樹木が大変影響があることから業務の経験を活かし、これからの世代を生きる子どもたちに自然と環境について直に触れながら学んでほしいと考えたからです。

これまでの経緯

はじめて「こと」を起こすことの大変さを思い知らされました。目的、方法、時期、スタッフ等を説明し「子ども樹木博士を当市の施設で実施したいので協力をお願いしたい」と言うも、「年度当初の計画以外は協力できない」と断りです。3度ほど時を空けてお願いし、何とか施設を利用しても良いことになり、現場情報誌にも掲載を約束してもらいましたが、いざ載せる段階では「スペースがない」と文句を言われました。子どもたちを集めるには、地方版新聞へ投稿したり、近隣の小学校や子ども会へパンフを持って出向き依頼しました。

2回目は、予め頼みに現場フィールドへ行くと、今年はやってほしくない。理由は計画時期の錯綜ときた？、そこで施設の上司に直談判し、上から話してもらいやっとできることになりましたが、この日しか空きがないと1ヵ月後がイベント日となり、焦りの日々を迎えたのです。幸いにも参加者は16名（子ども10・大人6）と多く、大いに満足したものです。この時のアンケートに「楽しかった、もっと覚えたい」と100%が答えてくれましたが、「今後の参加」は20%とわずかでした。

4～6回目は子ども集めに苦労しました。1年ごとに時季と探索路を変更し新鮮味を与えたつもりです。来てくれた方にハガキで連絡し、2度、3度と、中には4度とリピーターが訪れます。

応援スタッフには、イベント前に樹木現場を踏査してもらいます。当日は来てくれた子どもたちと集合写真を撮り、後日送付しました。また、記念品を配布し、一部は県の協力を得ました。最初は大判振る舞いでしたが次第にじり貧となり、8回目からはお願いをやめました。

6回目は8月の盛夏の時季で、参加者は7名（子ども2・大人5）でした。夏休みの自由研究の題材にしてほしいとの目論見は外れました。少ない参加者に、思い切って市の責任者に「陶史の森まつりイベントに協賛させて」とお願いに行きました。最初の頃は「お遊びと学習は性格が相違し馴染まない」と言っていましたが、この森の行事への参加者も減少傾向にあり、コラボレーション効果を期待してか受け入れてくれました。

7回目からは「陶史の森まつり」に協賛し、人集めに地方版新聞等への働きかけを省略でき、その上参加者がとても多くて楽になりました。また、肝心の認定会は、周辺に錯綜するイベントがあり、落ち着ける場所もなく、残念ながら取り止めました。

9回目は県のみどりの祭りに協賛しました。陶史の森まつりと併行のために前もって市長から依頼があり、実施後は市長から礼状をいただくという初期の頃からは考えられない厚遇となりました。小学4年生17名と先生2名が参加して25本の樹木の学習を行いました。質問も多く、賑やかで楽しく、心意気のある有意義な一日となりました。

岐阜県みどりの祭り・学びコース（H22.5.22）

10回目は、参加してくれた20名（子ども12・大人8）の集まりがまばらで2回に分けて行いました。樹木の観察では3年生の女子が多く、とても熱心で先頭に立ち、緑に関心のある良い子たちでした。

植物（特に花）に関心を持つ可愛い2年生くらいの女の子は集合写真の送付後にハガキをくれ、「緑が好き、これからも自然の植物の名前を覚えたい」との嬉しい便り。子ども樹木博士を援助してくれた3人のスタッフには大変ご苦労をかけました。共に疲れを癒すため一段落します。（全10回の総参加者数147名（子ども86・大人61））

シリーズ

東南アジアの木々たち（16）

—南国の象徴・ココヤシ①—

自然と植物の観察会　TREECIRCLE　梅本　浩史

私たちの国・日本も、だいぶ蒸し暑さが増してきましたね。4月の下旬、私は九州南部の宮崎県下で仕事をしていました。その時、暑い日には、もう外の気温が29℃…と言う日もありました。

そんな南九州よりも、更に蒸し暑いのが東南アジアの国々。この地域を訪れると、非常に沢山の種類の「ヤシの木」に出会えます。これまでも、色んなヤシの仲間を紹介して来ましたが、今回からはヤシの代表選手！「ココヤシ」の話にふれてみましょう。

ココヤシは、世界中の熱帯地方に広く分布する最もポピュラーなヤシの木。「南国のイメージ」そのままの姿・形をしています。「南国の風景を描いて下さい♪」と言われたら、きっと皆さんも「ココヤシ」の生えた島や海の風景を描くのではないでしょうか？

このココヤシの果実を「ココナッツ」と呼んでいます。よく耳にするココナッツミルクや、ココナッツクリーム、ココナッツジュースなどもみんな、このココナッツから採れます。

南国では、ココヤシの若い実に穴をあけて、ストローで直接飲む「ココナッツジュース」が、特に有名ですね。まるでスポーツドリンクのように、暑さで疲れ乾いた私たちの身体を潤してくれます。

また、独特な食感が美味しい「ナタデココ」は、ココナッツジュースを発酵させ凝固させたもので、約100年ほど前から作られてきたフィリピンの伝統食品のひとつなのです。

さて、次回からは、人々の生活にとても有用な「ココヤシ」の様子を、もう少し詳しく見ていきましょうね。

子ども樹木博士質問コーナー

茨城県植物園 緑のインタープリター
森林インストラクター 堀内 孝雄

これまでに寄せられた多くの質問の中から、一般的、共通的な質問についていくつか回答を掲載します。

Q カスミザクラはヤマザクラより花の時期が遅いようですが、違いが分かりません。ヤマザクラ、カスミザクラ、オオシマザクラの見分け方を知りたいです。

A ヤマザクラ、カスミザクラ、オオシマザクラは一見よく似たサクラです。野生のカスミザクラ、オオシマザクラも「ヤマザクラ」（山桜）と呼ばれることがあるので、注意が必要です。ヤマザクラ、オオシマザクラの開花はソメイヨシノと同じ頃か、少し遅れて咲きますが、カスミザクラは10日以上遅く咲きます。このため、ヤマザクラが満開になってもカスミザクラの花は見られないので、その違いが分かります。

ヤマザクラはシロヤマザクラ（白山桜）とも呼ばれ、花は白色一重の中輪ですが、よく見ると白～淡紅色まで個体により微妙な変異があります。花と同時に開く若葉は紅褐色で、全体が赤っぽく見えます。オオシマザクラは大輪の白い一重の花と同時に伸び出す若葉があざやかな緑色で、ヤマザクラやカスミザクラとの違いが分かります。

ヤマザクラとよく似たカスミザクラは、ケヤマザクラ（毛山桜）とも言われるように、小花柄や葉柄に多くの短い毛があることで、小花柄に毛のないヤマザクラと識別することができます。オオシマザクラの花の萼（がく）片にはギザギザがあります。この点で萼片にギザギザがないヤマザクラやカスミザクラと識別することができます。

なお、オオヤマザクラ（別名：エゾヤマザクラ）は花や若葉の赤味が強く、ベニヤマザクラとも呼ばれます。筒状のつりがね形の萼筒も赤味が強く、花序の下にある大きな鱗片は指でつまむと粘りがあるのでヤマザクラなどと識別できます。

カスミザクラ（磯部桜川公園 2012年4月）

Q 新緑のコナラの小枝に黄緑色のクルミ大のリンゴのようなものがついていました。何でしょうか。

A 小さなリンゴのようなものは、ナラメリンゴフシという虫えい（虫が作るこぶ）です。ナラメリンゴタマバチがコナラの冬芽に卵をうみつけたためできたものです。ほぼ球形の虫えいで、表面はなめらか、淡緑色～黄緑色で日の当たる面はリンゴのように赤く色づきます。内壁はスポンジ状で柔らかく、虫室が放射状に配列しています。そこに70～80匹の幼虫が入っていてサナギ（蛹）になり、5～6月に雌雄（有翅）が羽化します。交尾後の雌（両性世代）がコナラやミズナラ、カシワなどの根に産卵します。できる虫えいはナラネタマフシと呼ばれます。これから無翅の雌（単性世代）が12月に脱出してきます。これが樹上に這い上がって冬芽に産卵してできるのがナラメリンゴフシです。外国でも同じような例があり、英名をオークアップル（oak apple）といいます。

ちなみに、虫えいの名前の付け方は、「植物の種類」＋「形成部位」＋「形状」＋「フシ（五倍子）」とされ、ナラメリンゴフシ（楢・芽・林檎・五倍子）です。コナラやミズナラには、もう一つよく目にする虫えいがあります。ナラメイガフシ（楢・芽・毬・五倍子）です。これはナラメイガタマバチが作るもので、多くの針状片に包まれたイガ状の虫えいです。

ナラメリンゴフシ（茨城県民の森 2012年5月）

ア・ラ・カルト

樹木の名前・方言

方言（地方名）あるいは特定の民族だけが使う名を土名と呼んでいます。これらの名をもつ樹木は、その土地の人に利用されるか、毒になるなど何らかの点で関心がもたれているわけで、民俗学や応用植物学などでは時に重要な意味をもっています。

方言は、次のような根拠で名付けられています。

（用途） ダンゴキ（ミズキ）：民族習慣による団子木。カマツカ（ウシコロシ）：カマの柄（牛の鼻に鼻環を通す時、この木で鼻障に孔を穿つことから牛殺し）。

（形態） シデザクラ（ザイフリボク）：花穂の姿が白木綿あるいは白紙の四手（しめ縄などに垂らす紙）をかけたように白く見える。バクチノキ：樹皮が剥離することから、博打に負けて身ぐるみはがされることに喩えた。

（子どもの遊技） カギッチョ（ミズキ）：仮軸分枝の枝を互いに引っ張り合って切れた方が負けになる。オナモミ：勲章花。オーバコ：角力取草。

（含有成分） ナナカマド：水気が多く七回かまどにくべても燃えない、嫁泣かせ。イチロベイゴロシ（ドクウツギ）：猛毒で死亡する（人間を市郎兵衛で代表させたあるいは市郎兵衛さんが誤って食べて死んだことによるかは不明）。

（産地） ハクサンハンノキ（ヤハズハンノキ）：加賀の白山に多い。ニッコウモミ（ウラジロモミ）：栃木県の日光山地に多い。

（開花の時期） ハルコガネバナ（サンシュユ）。草花でナツガレソウ（ウツボグサ）：開花後盛夏には枯れてしまう。

（迷信） 悪魔払い（ナギイカダ）：ナギイカダは、その形態から悪魔が寄りつかないとされる。

（外来語） シナノキ：シナは「結ぶ、縛る、括る」を意味するアイヌ語から転じたとされる。

（音便） 正しい植物名をその地方独特の訛で発音されたもので、ギンナンがギンナ、センノキがセンノギなど東北地方に多い。

（森林インストラクター養成講習テキスト選集：樹木（谷本丈夫先生）から）

事務局だより

◆平成23年度の「子ども樹木博士」認定活動の実施状況は、前年度に比べて少し低調でした。通常総会前の速報ですが、実施結果として報告等をいただいたのは46団体（前年度60団体）で、実施回数は延べ73回（同91回）、参加者数は延べ約23百人（同31百人）でした。いずれも前年度を下回りました。平成24年度は、東日本大震災の復興・復旧とともに、「子ども樹木博士」の飛躍を期待しています。

◆認定活動を実施された場合は、その実施結果についてご報告をお願いします。報告用紙はホームページからもwordの用紙をダウンロードできます。用紙がないなどの場合は、実施団体名・実施年月日・募集対象と人員・参加者数・実施場所などをメモ書きしていただき、FAX又はメールなどでお送りください。よろしくお願いいたします。（O）

子ども樹木博士ニュース

2012年6月1日　No.47

子ども樹木博士認定活動推進協議会

〒112-0004 東京都文京区後楽1-7-12 林友ビル6階
一般社団法人全国森林レクリエーション協会内
TEL：03-5840-7471　FAX：03-5840-7472
E-mail：kodomohakase@shinrinreku.jp
URL：http://www.shinrinreku.jp/kyokai/kodomokyou.html
http://www.shinrinreku.jp/kodomo-n/main.html